

平城京右京一条二坊・二条二坊の調査 (平城第530次)

奈良文化財研究所は、本庁舎建替事業を進めています。2014年2月より旧庁舎の解体工事を始め、これと併行して4月14日に新庁舎建設予定地を中心とする発掘調査を開始しました。6月末までは敷地南部を対象としており、調査地は平城宮の西面中門である佐伯門の正面で一条南大路が通る場所にあたります。

敷地南部では、秋篠川旧流路を検出しました。旧流路は研究所敷地内を北西から南東方向に流れていました。この旧流路を埋め立てた黒色土に7世紀末から8世紀初頭頃の土器や瓦片が含まれていたことから、旧流路は平城京造営時に埋め立て、付け替えられたことがあきらかになりました。

そして、埋め立ての際には「敷葉(敷粗朶)工法」と呼ばれる古代の土木工法が施されていました。敷葉工法とは、樹木の枝や葉を敷き並べて地盤や盛土を補強する工法で、中国・韓国に類例があり、古代では狭山池(大阪府)の堤や山田道(奈良県)、水城(福岡県)の盛土底部に施されたものが知られています。秋篠川旧流路を埋め立てて大路を造成する際に、軟弱地盤を改良するためにこの工法が用いられたと考えられます。

和銅3年(710)に平城京へ遷都するにあたり、自然河川を付け替える等の大規模な造成工事がおこなわれました。今回の調査成果は、平城京造営にとともなう土木工事の実態を知ることのできる重要な成果です。

調査は現在も進んでいます。今後の調査成果にご期待下さい。(都城発掘調査部 小田 裕樹)



調査区全景(東から)